

## 言語運用にかかわる諸問題とそのモデルの検討

### －Chomsky と第二言語学習理論を踏まえて－

白井 一夫

#### 1 はじめに－問題の設定と本稿の位置づけ

本稿では問題を概観した後、以下の構成で聴覚障害教育における言語運用の検討を行いたい。

(1) 言語運用に関わるモデルの紹介と検討

(2) 言語モデルから見えてくる実践上の課題－いくつかの報告にコメントしながら

(3) 思春期の言語運用と自己意識の揺らぎや変容、それを視野に入れた 9 歳の峠以降の自立活動

私はこれまで複数回の指定討論を引き受け検討に参加してきた。本稿ではこれらに関連する研究や理論の紹介および自身の実践からのコメントを付加して、本シンプのテーマに迫りたいと思う。

#### (1) なぜ言語運用か、そして言語運用とは何か

最初に「聴覚障害教育における言語運用力伸張に向けた支援」について、下記のようにいくつかの前提を設定してから論を始めたい。

A. 語の定義－「ことば」を用いて「言語運用にかかわる力」を伸ばしていくための支援を「聴覚障害教育における言語運用力伸張に向けた支援」と呼ぶ。ここでいう「言語運用」は、チョムスキーに従い「ある言語の話し手が母語の知識（言語能力）を時間軸に沿って用いること」とする。

B. 支援方法－対人コミュニケーションを基本的なスタイルとしながらも、子ども自身の出力には「文を書く」「音声化する」「手指モードで表出する」「内言を活用して脳内で処理する」などのいくつかのパターンがあり、それに対する働きかけや促しを含む。

C. 支援の形態－以下のような各場面での指導が考えられる。一言で要約すれば「支援者がかかわる全ての言語行動が支援に転化する」とも言える。

- 1) 通級による指導のようなマンツーマンのセッション
- 2) 日記指導、手紙、ノート、メール、FAX などによる書記言語を通してのやり取り
- 3) 授業など、学習に関する支援時のやり取り
- 4) 様々な活動に子どもが集団で取り組む際の関わり。セッションの企画運営を含む
- 5) 上記の内容に関する生徒の状況のアセスメントとフィードバック

D. 評価と検討－上の A～C を踏まえて考えれば、言語運用にかかわる分析は計量化に馴染まないことが多く、子どもの言説を記録することとその内容分析が基本となる。

これらを、スタートラインとして予め設定していたわけではない。シンポで多くの報告を聞き検討する中で、次第に見え始めてきたものである。したがって、本書の内容に関して首尾一貫し整理された用語域や視座が確定しているわけではない。しかし、実践者に特有の「カン」により、私達は言外にこのような前提をもって日々実践を重ね、それをシェアしてきたことが見えてきた。

本書では、A～D に関わる多くの実践と研究が「実践からの提言」に収められている。第 3 章では、これらに分析と検討を加える。本稿は、言語モデルの検討と紹介並びに内省と自己意識の発展を中心に扱う。検討にあたり、各報告に触れつつも私自身の指導支援の経験で捕捉することとなる。

#### (2) 問題は何か－9 歳の峠と聴覚障害から生ずるニーズ

聾学校に勤務していた時に、多くの先輩や同僚が異口同音に「聴覚障害の子どもはことばの力が弱いから」と言っていた。しかし「ここで言う『ことばの力』とは何なのか」「年齢段階を追ってこと

ばのニーズは変わっていくのに、それを整理せずに『ことばの力が弱い』という一言で切り捨てていないか」と思い続けてきた。中学部や高等部での自立活動の報告にも数多く接したが、この言語力の弱さの検討が等閑にされたままで、砂上の楼閣のような印象を持つこともしばしばであった。しかし、思春期の子どもと向き合って指導して、「おれの言っていること、わかんないんだろうな」と思うことがある。そんな時「最後は『ことばの力』だ」と思ってしまう。こんな経験を重ね、思い悩みながら「思春期の子ども言語力」「思春期の子ども言語指導」といった問題を漠然と考えるようになった。そして、その頃も今もずっと抱き続けている次のような感慨がある。

- ・ 幼稚部での言語獲得の実践の蓄積は、素晴らしく厚い。
- ・ 学童期の文法的な指導や語彙の指導は、試行錯誤を経つつ、これもかなりの蓄積がある。

「9歳の峠」の時期を画期として見渡してみると、この時期及びその以前の時期の子どもへの支援と実践の蓄積は大変に厚い。それらに比して「それ以降の時期にことばをどう育てるのか」の議論や検討は途端に少なくなる。そこで行き詰まり感を覚える子どもたちは確実にいるのに、その支援が議論の俎上に上がらない状況が続いてきた。子どもの状況を大雑把に下記の二つに大別してみよう。まず、9歳の峠で四苦八苦している子ども、彼らの多くは助詞や複文などに問題を抱えている。一方で、この段階の課題は概ねクリアできており、この点には深い問題は抱えていないという子どももよく見る。前者について、思春期を迎えても相変わらず格表現だ、構文力だ、と言って指導するのが正しいのだろうか。後者については、「大丈夫、あとは自然と力が着いていくよ」とか「指導すべき内容が見当たらない」と言ってしまいそうになるが、果たしてそれでいいのか。9歳の峠でまごついている子どもにも、そこはある程度クリアできている子どもにも、等しく支援は必要である。しかし、単純な言語能力の観点だけでその中身を構想することができないのも明らかだ。思春期固有の課題はどの子にも危機をもたらす可能性がある。その支援は、子どもの言語能力と生活場面での種々の言語パフォーマンスについてのアセスメントを踏まえなければ成就し得ない。こう考えると、問題の複雑さの前に立ちすくむしかない気がしていた。

## 2 聴覚障害教育における言語運用の検討

### (1) 言語運用に関わるモデルの紹介と検討

前項のような経緯で、私は言語や言語能力の問題を考えてきた。そんな中で、「言語運用にかかわる高井モデル(図1, 以下, 高井モデル)」と出会った。高井モデルは、核に「言語そのものの基礎」を、その周囲に「言語を運用するのに関わる力」を配している。このモデルを使えば、思春期の子ども言語をめぐる状況を「言語運用」という切り口で下記のようにとらえることができる。

- A) 表面に出てくる表現の「正確さ」が問題ではないこと。従来指摘されることの多かった、助詞、複文、やりもらい文などの事例では、問題が露わになっているので取り組みも評価もやり易い。しかし、言語運用では表に出ているのは個々の場面における活動の様子やその結果で、言語力の実態はその後ろに控えている。
- B) 表に出るものが充実しない、或いは、的はずれだ、という時には、核となる言語力の未成熟の問題が横たわっている。

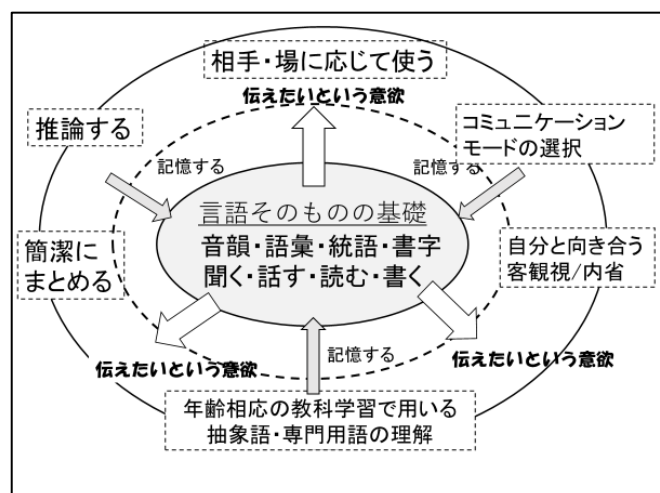


図1 言語運用にかかわる高井モデル